

第1回みやぎの将来ビジョン県民会議の発言概要

1	テーマ	わたしが考える10年後のみやぎ
2	開催日時	平成18年5月27日(土)13:00~16:00
3	開催場所	県庁2階 講堂
4	出席者数	31名出席

- ・雇用問題は21世紀における最大の問題。この前のフランスにおける暴動を見ても、日本に限らず世界レベルでの問題であることが分かる。これまでは国の政策が主だったが、これからは県や市町村が主体的に全く新しい「雇用計画」を策定していくことが必要。
- ・育休の制度はあるが、実際は活用されていないことが多い。共稼ぎ夫婦の場合、子どもを産むことは収入面でも不安定になる心配が出てくる。子育てに対する金銭面での支援を充実してほしい。
- ・東京に住む友人が「仙台は良い」と言っている。新幹線や病院など、社会基盤も整備されている。そういった点を生かしながら人を呼び込めるようにしてほしい。
- ・トップだけが輝く県ではダメ。一人ひとりが輝く県であってほしい。そのためには、新しいことを追うばかりでなく、地域に残る古いことにも目を向けなければならない。
- ・バリアフリーは、福祉分野、障害者だけを対象と考えがちだが、障害者、高齢者、子ども、外国人など、ハンデのある全ての人たちも対象になる。それらの人たちが遠慮なく暮らしていける地域を目指すべき。
- ・公園や娯楽施設のバリアフリーもまだまだ。バリアフリーが、点から面に広がっていくことを願っている。
- ・今の宮城県は、他県と比べて進んでいるのか、遅れているのか。県の施策が県民に伝わっていない印象を受ける。
- ・今の子ども達は地域のことを知らない。そして、自らが進むべき道、方向性を知らないと思う。自らの足元を見て、「温故知新」の精神を子ども達に伝えなければならない。
- ・便利さが本当に幸せなのか。東京、大阪は本当に幸せなのか。大きな建物を財産と思うのではなく、川、田、自然を財産と思わなければいけない。
- ・お金を稼いだり、大きな建物を建てたりといった、力以上のことをしてもどこかに無理がくる。これまでの取組を振り返って反省することも必要。
- ・ゆとり教育を見直す必要がある。今の小・中学校で教えている内容のレベルは驚くほど低い。宮城県でも学力向上に取り組み始めたようだが、まだまだ足りない。
- ・宮城県出身で東北大学や東京大学に入った人が、宮城県に戻らない。そういった人が残るようにすることが必要。
- ・人口が減っていく中、また財政状況が悪化する中、県の役割も代わっていく。例えば商店街活性化一つを取ってみても、これまで行政が出してきたお金は本当に「生きた」ものだったのか。これからは、ガバナンス、マネジメントのために、行政が知恵と汗を絞らなければならないし、そのためには県と県民との間に信頼関係の構築が必要。

- ・マンションの管理人をしている。管理会社は利益しか考えない。行政が人の管理をしてほしい。
- ・身近なところにも偉人はいる。県内では無名でも、全国的には有名な偉人も多い。そういった人を掘り起こし、地域の小中学生に伝えることが必要。
- ・宮城県の人口増加の半分は外国人。外国人が地域コミュニティの一員として能力が発揮できるようにしなければならない。
- ・外国人県民が抱えている悩みというのは、実は他のみなさんと同じような悩み、ということも多い。そういった外国人に対し県がサポート施策を行っていたとしても、それを知らない、分からないこともある。行政内部でも横断的に取り組んでほしい。
- ・2年かけて宮城県全体を回ったが、仙台市とそれ以外の市町村のギャップ、落差が非常に大きいと感じた。特に道路整備に関しては大きな格差があると感じた。
- ・エリート教育が必要。トヨタのボーディングスクールが報道されていたが、日本に限らずアメリカでもこのような教育は当たり前。10年後のみやぎはエリート人材の発源地を目指すべき。
- ・いわゆるIT企業に勤めている。県内には興味深いコンテンツが多くあると感じる。しかし、それを生かしていないし、またIT技術も生かしていない。例えば農業にコンピューターを導入するといった取組もできるのではないか。
- ・心の豊かさ先進県を目指すべき。今の総合計画を見たが、心の問題についての視点が欠けているのでは。
- ・高齢者の多くは、「何らかの役に立ちたい」と思っている。私はもう75歳で、10年後に生きているかどうかは分からないが、明日のために今日頑張っていきたいと思っている。
- ・宮城県に暮らす人だけでなく、他地域から訪れる人にとっても快適に暮らすことのできる空間づくりが必要。
- ・安全とは命に関わる物理的要素であり、安心は豊かな生活を保つための心理的要素。犯罪も非常に増えている。地域間あるいは行政とも情報を共有できる体制が必要。双方向の情報共有が住民の危機意識、自ら地域を守ろうという意識を高め、効率的な犯罪抑制活動につながる。
- ・10年後は、私も結婚して子どももいるかもしれない。今、安全・安心な地域を作る活動を行うことは、10年後のみならず100年後の宮城にとっても重要。
- ・昨年度、県で環境基本計画を作った際、いろいろな環境団体の意見を取りまとめて提出したのだが、その際に各団体が口をそろえて「10年後の宮城県は今より環境が悪くなっているだろう」と話していた。
- ・県の職員は、もっと現場に出てきてほしい。また、県民も県の政策に興味のない人が多いので、掘り起こしてほしい。
- ・応募の際、普段生活している中で考える宮城に対しての大まかな意見を書かせてもらった。10年後の宮城は全市民にとって本当に住みよい街になっているか。何かひとつ「これぞ宮城の街の特徴」といった新しいことを始める必要があるのではと考えた。
- ・皆さんと意見交換しながら、10年後の宮城に繋がるような地域づくりができたらと考える。

- ・食育で宮城を活性化したい。食育を中心に据えると第一次産業を活性化できる。
- ・高齢化社会というが、60代、70代は第2の青春時代。まだまだ働くだけの活力はある。働く場所が不足しているのではないか。そのためには行政の力も個人の力も必要。働く場所の確保が積極的な福祉対策である。
- ・ALTとの交流を通して、宮城に根付いている文化（食住居）をしっかりと認識していかなければいけないと思った。国際交流は大袈裟なこととはしなくてもよい。
- ・暮らしの安全・安心の視点から意見を出せればと考えている。
- ・以前、仙台市内でヘルシンキセミナーが開催され参加した。その中で、ヘルシンキの役所は物事を決定するに当たり「議論の輪を作る」、「決して急がない」、「納得できるまで議論する」と説明された。それが本当の民主主義ではないか。
- ・「宮城県総合計画」(平成12年3月策定)の概要版の冊子を見ると、その5ページに絵が掲載されているが、これでは生活者の姿が見えないと感じた。福祉や環境や教育が柱になっていいのか。例えば、「安心して子育てができる」地域社会を創るということをや柱にし、それを物差しにして物事を決めていくことが重要。道路を造るにしても、母親たちが乳母車で通ることができる、また障害者も車椅子で通ることができるといったことを設計の段階から考えて作る必要がある。何の施設でも同じだと思う。それが本当に安心とゆとりの地域づくりにつながる。
- ・物差しをいくつか決めておけば、後はその物差しに照らしてやっていくことが行政にとって必要。
- ・我々企業も、就業率が低下していることは承知している。宮城県の就業率を上げるにはどうすべきか考えた。住む人を増やすあるいは訪れる人を増やすにはどのような施策を行うべきか検討する必要がある。
- ・住みよいまちづくりのためには、自然環境と人間が生活する物理的な環境をどのように調和していくか、また地域固有の文化をどのように継承していくべきか、そういったことが重要なテーマであると考えている。
- ・地域に住む人々に、親近感をもってもらえるまちづくりが必要。シャッター通りなど、商業空洞化が起きているが、職住分離という考え方ではなく、もっと職と住が混在する人間味あふれる空間としての商店街あるいはまちづくりが必要だと思う。
- ・自分の思う10年後の宮城は、夢と現実が交錯しているが、若年人口が増加に転じ、都市部にも地方にも子どもたちの元気な声が響き、県民各層が自分の役割を自覚し、循環型社会の持続に向けて希望を持って生活している「みやぎ」である。
- ・10年後は、市町村合併がさらに進み、県内7広域圏毎に7市に統合され、それぞれの市が自立の道を歩み連帯して発展し、豊かな資源を生かした地域産業が創出され、若年層の定住化が進み、高齢層は社会活動に積極的に参加している、そんな「みやぎ」を想像している。
- ・「美しい心=美しいビジョン」であると確信している。子ども達のために手伝って欲しいとお願いされて、いやな顔をする人はいない。経済優先ももちろんだが、そのためにも精神性を大切にすべきでは。個別の知識を寄せ集めるだけでは、子ども達に生きる力を身につけさせることはできない。物語の世界が子どもと社会を結びつけていく。偉い人だけでなく、お父さんでも物語になる。
- ・先日、地元市の総合計画におけるまちづくりへの提言を行った。市民の危機感は大きくなっている。

- ・ 6年前から、個人で子ども達のための化学実験塾を始め、主に子ども達の好奇心開拓をモットーた活動をしている。5年前に、多くの人の協力を得て、NPO法人として週末に子ども達の学校を運営している。昨年「NPO法人TERAKOYA」に合体し、さらに大崎教育支援ボランティアネットワークを作ろうと挑戦している。
- ・ 子ども達への支援活動を通し感じたことは、金を使わずとも、結構なことはできる。
- ・ 一番に考えなければならないのは、少子高齢化についてである。50年後、町自体がなくなるかも。
- ・ 宮城県教育委員会では、一学区制への移行を画策しているようだが絶対反対だ。地元市長にも県教委にしっかり言うように言った。一学区制にすると仙台市と郡部との地域間格差が今以上に広がってしまう。教育の内容についても、国の教育基本法改正に対して、宮城県からモノを言わなくてはいけない。
- ・ 医療関連について、制度改正で、保険負担が増え支給が削られるということに、宮城県として国にモノを言うべき。
- ・ 品位のある県政、宮城県というものを、行政も県民として目指すべき。過去の知事や市長などの逮捕は恥ずかしい。
- ・ 宮城県は東北の中心として自負し過ぎ。その地位に甘えており、旧態依然とした体制から抜け出せないでいるのではか。重い感じがして躍動感が無い。
- ・ 岩手県は一関市から盛岡市まで工業地帯化している。以前の宮城県は企業誘致に積極的でなかった。山形県は第一次産業と観光を結びつけている。宮城県は創意工夫が足りたのでは。
- ・ 一番に考えなければならないのは、人材育成についてである。10年後の宮城は、各分野で素晴らしい指導者が動ける体制をつくり、東北地方の真のリーダーシップを取っていければいいと思っている。
- ・ 宮城県は素晴らしい地域資源を持っている。この地域資源を有効に生かして、地域再生、都市再生をどのように進めていくかが大切である。
- ・ 国は国家戦略として、科学技術会議への対策を考えているようだが、宮城県の参加はいかがか。
- ・ IT化やグローバル化など、世の中が今までと違うスピードで変わっている。目に見えない不安感や喪失感が人々の間に広がっている。
- ・ 宮城県に留まっても居心地の悪さを感じたりする。古くからの土地、人間の結びつきが失われ、どこの自治体でも安全安心を全面に出さないと住民が安心しない。
- ・ 新しい時代に向かって自由かつ大胆な発想で物事を識別、判断、構成しなければいけない時代。
- ・ 10年後を予測することは難しい。そういう中で、資本主義に影響されない社会づくりを行っていくことが大切。金にまつわる出来事が多すぎる。
- ・ 世界の経済と日本、そして宮城県の経済もリンクしているが、極端な話、宮城県は鎖県して10年位他との接触を断ち、その間に重点的に人材育成をやるべきである。
- ・ 行政システムのあり方にも関わるが、市民・県民との協働について、迅速にサポートできる体制をつくるのが行政の仕事と感じる。

- ・ 10年後を見据えた取組としては、宮城県に住む人が、宮城県の良さを知ることが大切。それが、ひいては人口流出を止め、他地域からの流入につながる。別の角度から言えば、基礎社会学を大事にする施策が必要。
- ・ 林業に携わっているが、林業のことを考える前に、全体の現状や問題点、これからの姿を考えていかないと個々の問題解決には至らないと思う。
- ・ 今、未来の明るい10年後は考えられない。これから県単位で生き残りをかけた戦いが始める。人口減少は、生産者・消費者の双方を減らしていく。経済はますます落ち込んでいくだろう。まず、この辺りから対策が必要。
- ・ 地域コミュニティが失われた原因として、住宅設計の立場から考えると、住宅や家族構成が変わった。特に、縁側や囲炉裏がなくなったのが原因として大きい。
- ・ 今は仕事もやめて、趣味や地域活動に参加している。宮城県沖地震の発生に備えての自主防災組織も立ち上げた。そして、一番感じたことは、地域のコミュニティの重要性である。どのようにすれば地域自治の力が向上するのかである。
- ・ 「官から民へ」という言葉のとおり、仕事を民に委ねる仕組みを考えることが大切。具体的には、地域づくりをサポートするNPO的なものを小学校管轄エリアごとに作って、官と民の橋渡しをする。その中で、地域の福祉、教育、防災、防犯といったいろいろな課題を考えていく。そのような人材を各地で育て、その人材の有効活用によって豊かな宮城県に繋がっていく。
- ・ お年寄りが行政に頼るのではなくて、自分で働くことができる社会が必要。情報発信などのバックアップをお願いしたい。
- ・ 仙台市は東京のように大都市化し、昔ながらの良さが全くなくなっている。杜の都とは言えなくなってきている。
- ・ それぞれの町の良い部分を生かしながらやっていけば良いのでは。
- ・ 仙台市とそれ以外の市町村との格差がますます拡大している。地方に住んでいて、地盤沈下は非常に著しいと感じる。仙台市以外の者として何か提言できたらと思う。
- ・ 先ほど、外国人の受け入れについて色々な問題があると発言があったが、その一つとして、外国人の就業差別の撤廃というのは非常に厳しい感じがする。そこまで差別されているのか。
- ・ 去年、県内のある町で外国人に関する調査をした時に、就労目的で来た方ではないのだが、配偶者としての在留資格で就労は限られているものの家計のためにと単純労働に応募したところ、中国人だと判ると突然拒否されてしまった。それは特定の地域に限ったことのようにだが、合法的に入国した人でさえ差別されるという現実がある。全県の実態がどうなっているか調査が無いのでわからないが、横断的な対策は必要だと思う。
- ・ 今の発言に関連するが、私の地域にも、中国人、韓国人、フィリピン人が増えており、同じようなことが起きている。
- ・ 村井知事は県のキャッチフレーズとして「富県」を標榜しているが、「富県」は“富国強兵”のイメージに繋がる。皆さんはどう思うか。富県という言葉については、説明しないと理解されないような言葉を使うのは問題がある。誤解を与えないような言葉を県民に示してほしいと思う。

- ・雇用問題は、伝統的捉え方では経済白書のようなデータで捉えられがちだが、県民は、日常生活の中で働く場を確保して、地域社会を豊かにしたいと考えている。しかし、国の雇用対策だけでは達成することは出来ない。
- ・県は主体的にこの問題を捉え、あるいは市町村が主体的に捉え、新しいビジョンにこの問題を取り上げ、地域の人々に、企業に、あらゆる分野に示して行ってほしい。県には、物の考え方の転換をお願いする。
- ・地域の課題を皆がどのように考えるかが大切。対象は宮城県だけではない。新しい地域コミュニティ形成により、安全安心のまちづくりといった住みよい暮らしや、地域活性化をどうするかということだと思う。協働という形で自分たちが地域でどのようなマネジメントの核になって進めていくか、その手順を効率的に進めていくことが大切。
- ・この議論よりも、もう少し大局的なビジョンと、10年先ではなく100年先といった様々なスタンスで発言することが、バランスのいい効率的なビジョンの策定につながる。
- ・地方分権で最も重要なのは、地域資源を知り、県の未来を構築し、引っ張っていくのは県の職員であるということ。そうだとすると、こういったことを話し合った後で、県がどういう姿でどういう仕事をし、県民の付託に答えるか。そのための県庁の機構組織のあり方についての項目があってしかるべきでないかと思う。
- ・この会議の進行について、ここに集まった人たちがそれぞれに特色ある意見を出して、それを1つにまとめるということではないだろうと思っている。いろんな意見を集約して、県事務局で審議会に提供するのではないのか。ある特定の意見に対して、賛成、反対という議論ではないと考える。
- ・公平という言葉に逃げないでほしい。登米市に合併した中で、9町の関係者を集めた会議を開催するためその分野のリーダーに声をかけようとしたところ、ある特定の人に声をかけたのでは公平さに欠けると言われて逃げられてしまった。あまりむやみに「公平」という言葉を使わないでほしい。
- ・地域づくり、まちづくりには産学官の協働が欠かせないという話が出ていた。以前、姉妹都市のアメリカの都市に行ったら、65,000人くらいの町で議員が10人位しかいなかった。あとは協働、ボランティアのシステムでやっているとのことだった。日本ではそこまでいっていないのが実情だが、住民との協働のあり方についてもっとNPO法人が貢献できるようなシステムを考えているか。
- ・三位一体改革で5兆円削減したという話であり、行財政改革をやっていく中でもっとNPO法人を活用してほしい。